

❀ 北浦定政関係資料、重要文化財に指定

奈良文化財研究所が保管する北浦定政関係資料1095点が、平城宮木簡とともに重要文化財（歴史資料の部）に指定されました。

北浦定政（1817～1871）は幕末に活躍した、宮跡・条里・陵墓などの研究者ですが、特に注目されるのは奈良盆地の条里制と、平城京に関する研究です。それまでは正確な範囲すらも分かっていなかった平城宮・平城京の構造を初めて本格的に研究した、つまりは平城宮・平城京研究の出発点に位置する研究者が、北浦定政なのです。

彼の学問の特色は、そのフィールドワークにあります。彼は奈良盆地中を自ら歩き回り、地形・地名を調べ、自作の測量車で測量までしています。そして、古代・中世の古文書に出てくる地名を現在地に比定し、その結果、古代・中世の土地制度である条里制の原理、さらには平城宮・平城京の区画を明確にすることに成功したのです。正確な地図など全くなかった時代に、西洋の学問が日本に導入される以前に、彼の独力によってこのような研究成果が達成されたのは驚嘆に値します。彼の平城宮・平城京復原案は、細部においてはもちろん間違いもありますが、全体的には今なお十分通用する復原に仕上がっているのです。

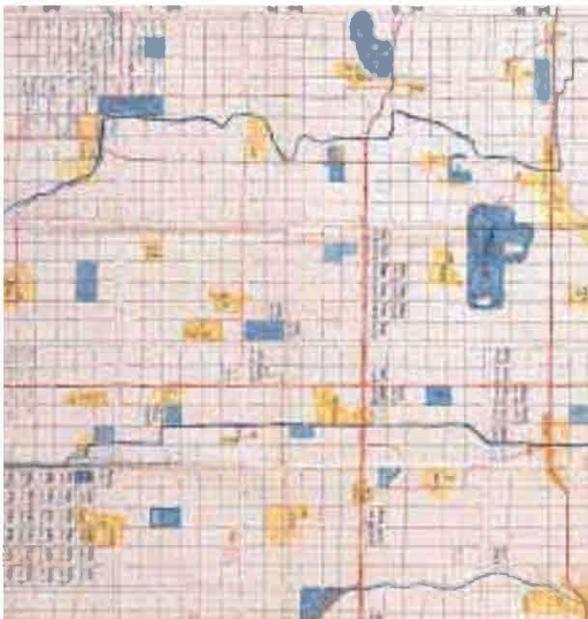
北浦定政関係資料の内容は、彼の著作のほか、彼の草稿・メモ類、彼が自ら写し取り、手許に置いていた古代・中世史料の写本、さらには和歌の短冊や

書簡などより成っています。どちらかという、研究成果を記した著作などよりも、調査・考察の過程を記すものが多いと言えるでしょう。例えば、彼は踏査の過程で奈良盆地の状況を事細かに記録していますが、そのような記録は、開発が進んだ現在では、当時の地誌としても貴重な資料となっています。

これらの資料は、彼の死後、ご子孫によって大切に保管されてきましたが、1992年に曾孫の北浦直人氏より、研究上の縁が深いということで、当時の奈良国立文化財研究所に寄贈されたものです。

彼の研究は地味なフィールドワークに基づいたものであり、一般にはさほど知られていないかもしれませんが、その調査・研究過程を記した資料が価値を認められ、重要文化財に指定の運びとなりました。奈文研の研究の一つの大きな柱は、奈良の文化財を対象とした地道な調査研究です。我々奈文研職員も、フィールドワークの原点を忘れずに、調査研究をおこなっていく気持ちを新たにしています。

（文化遺産研究部 吉川 聡）



北浦定政関係資料 大和国坪割細見図